

---

# 虚構世界の魔法使い

緋鉦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚構世界の魔法使い

### 【Nコード】

N9154Y

### 【作者名】

緋鉦

### 【あらすじ】

「長く生きてれば、もっと賢くなれると思ってた。間違えも、過ちも、後悔もしなくて済むようになると、そう思ってた。」  
過去の罪を贖うための、先の見えない旅の途上。ある時訪れた町の中で、二人は一人の少女と出会った。人々の淘汰を図る魔術師達と、魔術師の殲滅を掲げる人々と。幾つもの思惑の狭間で、過去を奪われた少女は己の進むべき道を模索し、過去を引き摺る二人は新たな居場所を探し求める。

## 序章 過日の記憶

一帯を覆う分厚い雨雲は、今日も青空を隠している。

太陽は淀んだ雲の向こうに隠れ、もう何年もその姿を見せていない。それだけでも十分に異常ではあるのだが、加えてもう一つ、看過出来ない問題が中空を埋め尽くしていた。

見上げる曇天に光る無数の白い粒は、季節を無視してこの数年間降り続けている雪である。降雪量が決して多くないことだけが、唯一救いであると言えるだろう。

それはとある地域のみで見られる、局地的な異常気象。

一般的には、そう思われている。

その地域 ラモネアの町は、氷雪都市の通称を持つ大きな町だ。北の大陸に存在し、元来降雪量の多い町であったことが、人々の意識からその異常性を多少和らげているのだろう。

冬が終わって芽吹きのない春が訪れ、晴れない曇天に不審を覚えながら夏を迎え、降り止まない雪に怯えて秋が巡り、不作を嘆きながら厳寒の冬を耐え忍ぶ。

一年の半分を雪に覆われた土地に生きる人々といえど、この異常気象はさすがに享受出来るものではない。そういう土地柄であるうと、寒さにある程度の耐性があるうと、作物さえろくに育たないのでは生活出来ようはずもないのだ。

最初の年は、近隣の町からの支援を得て凌いだ。

翌年は、事態を重く見た南の大陸から支援の申し出があった。

それから数年、異常気象はその原因も不明なまま、対策もろくに打てないまま、今日まで続いているのが現状である。ラモネアの町を離れた人間も少なくはない。

見捨てられた土地だと、嘆く者がいた。

人々の業が招いた結果だと、怒る者がいた。

自然の猛威を前に抗う術はないと、腐る者がいた。

「私、ですか？」

降り続く雪に埋もれ、住人を減らし、治安は乱れて活気の失われたラモネアの町。

その町の片隅に、葉を付けることを忘れた木々に囲まれながら存在する建物の一つ。元より閑静な自然の中にあつて、その建物は一層沈んだ雰囲気纏つていた。

「血縁者であるステルシア・フィオンズ・エルニカ様を、という話です。慈善事業というわけではありません……孤児だからといって誰も彼もというわけにはいきません」

「血縁者……ほんとに？」

「はい」

その建物 孤児院には現在、院長夫妻を含めて十五人の人間が暮らしていた。

先の戦争が終わつてから、まだ十数年しか経っていない。世界中を巻き込んだ戦争によつて乱された平穏が、それだけの年月で整う道理もなく、ここで暮らす孤児の半分以上は戦災孤児であつた。

残る数人はこの数年の異常気象に起因する口減らしか、何らかの事情で両親と死別したか、である。

ステルシア・フィオンズ・エルニカがこの孤児院へ迎え入れられたのは六年前で、奇しくもそれは、この止まない雪が降り始めた頃だつた。つまりステルシアは戦災孤児でもなければ口減らしでもない、別の とある事情で両親と死別した孤児である。

だからこそ。

大分今更ではあるが、今回のように迎え入れる人間が現れたこと自体は、特におかしな話でというわけではない。

長い時間を孤児院で過ごして来た院長にとつても、これが初めての経験というわけではないのだ。

「……………ふむ」

突然現れた来客者を一瞥し、院長は目を閉じて自らの頭を撫で付ける。

十五人もの人間が暮らすには、少々手狭と言わざるを得ない孤児院の応接室。そこでは現在、院長夫妻とステルシア、それから来訪者である黒いスーツ姿の女性が小さなテーブルを囲んでいた。

元より広い部屋でもない上、テーブルとソファア、壁に並ぶ本棚と暖炉、窓際に陣取る執務机のおかげで部屋は余計に狭く感じられる。

中央のテーブルを囲み、上座に座るのはステルシアだ。

その左側には、院長夫妻。ステルシアの右手で、つまり院長夫妻と向かい合う席にはスーツ姿の女性が腰掛けている。

客間の扉の向こうで時折聞こえる足音は、孤児達が聞き耳を立てているからだろうか。

この日、ステルシアに里親が現れた。

それは院長夫婦にとって、寂しいと同時に喜ばしいこともある。今年で十六歳になったステルシアも、年齢的には孤児院を出ていい頃合だ。

だが、今の荒廃したラモネアに一人放り出されたところで、生活していくのは難しいだろう。そんな事情があるからこそ、未だこの孤児院に居続けているのが現状である。

「……少し、よろしいですか」

「何でしょう」

難しい顔をした院長の問い掛けに、スーツ姿の女性は変わらない調子で答える。

「エティカ様、と申されましたか」

「はい、エティカ・ヴィエリ・ピースと申します。呼び捨てで構いません」

エティカと名乗った女性も、まだ随分と若く見えた。

ステルシアと並べてみれば、姉妹としても通じる年齢だろう。

ステルシアは黒の長髪と、銀を散りばめたような青い瞳を持っている。対してエティカは髪も瞳も明るい栗色で、顎の高さで切り揃えられたショートヘアは、毛先に少しだけウェーブがかかっていた。

この二人の容姿では、年齢こそ近くとも「姉妹だ」などとは通用しないだろうが。

「……………」

まるで声音を変えないエティカの受け答えに、院長は少しだけ渋い顔をした。白髪が目立ち始めた頭を撫でつけ、小さく溜め込んだ息を吐く。

さすがに三十歳近くも年下の女性に尻込みすることはないが、まるで機械を相手にしているようで調子が狂う、というのが院長のエティカに対する印象だった。

「……ステルシアはこの院に来て六年になります。何故、今更になつてそのような話を？」

「当主様は『民間防衛機構<sup>クロム</sup>』の重役で御座います。先の大戦から続く混乱もあり、ステルシア様のご両親がお亡くなりになられたことも、これまで耳に入れる機会に恵まれなかったのだ、と聞いております」

院長とて、ステルシアを里子に出すことを渋るつもりはない。いつまでも孤児院に置いておくわけにもいかないし、年齢的にも一人立ちの時はそう遠くないと覚悟はしていた。

勿論、惜しむ気持ちもないわけではない。六年もの長い時間を一緒に暮らしてきたステルシアは、実子のいない院長夫妻にとって実の娘も同然だった。

孤児たちの中では年長者である、と自覚してのことか、あるいは生まれ持った性か。

他の孤児達の面倒もよく見てくれるし、家事の手伝いも自ら引き受けてくれる気立てのよさ。

だからこそ、ステルシアを引き取りたいと申し出る里親がどういう人物なのか、見極めたいという思いも芽生える。

「……ステルシア。この話、お前は思う？」

問われて、ステルシアは「私？」と小首を傾げてみせる。

院長にとって、今回の話は願ってもないほどの好条件だった。里

親の名前はこんな辺境に住む自分達でも知っているような『民間防衛機構』の重役である。どう転んでも、悪いようにはならないだろう。

少なくとも、この荒んだ町でこれからの人生を浪費するより、幾分有意義であるはずだ。

「私は……うん、その人に会ってみたい。何か思い出すことも、あるかも知れないし」

「……そう、か。お前がそう言うのなら、私達も喜んで送り出すでしょう」

「じいちゃん……」

「……院長と呼べ」

呆れたように、それでいてどこか嬉しそうに、院長は目元を和らげる。

話が纏まると、エティカは三日後に迎えに来ると言い残して孤児院を後にした。

荷造りのための時間と、六年もの長い時間を過ごしたこの場所とのお別れのための猶予だ。いつもより少しだけ豪華な夕食と、お別れの挨拶と。

「お姉ちゃん、どこか行っちゃうの？」「お金持ちのどこに行くんだろ？」「もう会えなくなっちゃうの？」「いいなー、毎日美味しいもの食べられるんだね」「あたしも、ねーちゃんと一緒に行きたい」「また一緒に遊べるよね？」

まだ幼い孤児達の反応は、湿っぽさのないどこかあっさりしたものだっただ。

物心ついた頃にはここで暮らしていた、という事情もあるのかもしない。

逆に「お別れ」の意味を知っている孤児達は、あまり言葉を並べない。

涙を堪える彼等、彼女等の頭をステルシアは優しく撫でてお別れの言葉の代わりとした。

約束した三日目の朝は、思うより早く訪れた。

冷たく、澄み切った朝霧の中、孤児院の玄関で院長とステルシアは静かに佇む。

相変わらず降り続く雪は、塀に囲まれた敷地を白く染め続けている。

庇の下で雪を凌いでいるステルシアは、雪の重量で庇が潰れたりしないだろうかと思いを考えていた。

ステルシアの、どこか物憂げな視線で空を見つめる姿に院長は頬を緩める。普段と変わらないステルシアの態度に、院長は言葉に出来ない寂しさを感じていた。

ステルシアが何を考えているのかを知れば、その感動も溜息に変わるだろうことは想像に難くない。

他の孤児達は、まだ眠りの中にいることだろう。

院長の妻は、やがて起きて来るであろう孤児達のために朝食の準備をしている。ステルシアとの別れの挨拶は、先ほど済ませたところだ。

「.....」

「.....」

会話らしい会話も交わさないまま、ただ時間が過ぎるのを待つ。それから間もなく、孤児院を訪ねて来たのは一組の男女だった。

男の方は、細身で背が高い。

目に痛い程の鮮やかな赤いコートに身を包み、フードの奥には黒い前髪と、細く吊り上がった金色の瞳が覗いている。町を歩けば擦れ違う子供達を一人残らず泣かせてしまえそうな、いかにも凶悪な相貌だった。

その男より三步後方に佇むのは、栗色の長髪と茶色の瞳を持つ女だ。どこか気品の漂う純白の浴衣に淡い紅色の羽織を纏い、大きめの白い雨傘を両手で握り締めている。



栗色の髪や、落ち着き払った仕草とその優美な立ち姿は、確かにエティカにも共通する特徴ではある。だが、エティカの髪は長くないし、瞳の色も少々異なる。

つまるところ、ステルシアにも院長にも面識のない相手だ、ということだ。

最初、院長とステルシアは彼等をエティカの関係者かと考えた。

「ここが中心、なんだよなア？」

訝しむ院長とステルシアを無視して、赤いコートの男が背後に控える女に問う。見ようによつては微笑んでいるように見えないでもない無表情のまま、女は静かに頷いた。

それを確認した男は、口の端を吊り上げてステルシアと院長へ向き直った。その獰猛な笑みを前に、院長は凡その状況を把握し、強張った声を上げた。

「ス、ステルシア、早く中へ」

逃げなさい、と続くはずの言葉が、ステルシアの耳に届くことはなかった。

その代わりに届いたのは視界を染める赤と、錆びた鉄の臭い。

コマ送りの映像を追いかけるようなスローモーションの世界の中で、倒れ行く院長の姿を呆然と見送るステルシア。

「じ、い……」

何が起ったのか。

何故院長が血を流しているのか。

何故門の前に立つ男は笑っているのか。

頬を濡らす感覚に意識を呼び戻されて、緩慢な動作で持ち上げた右手が頬に触れる。

自らの意思で動かしているはずの右手なのに、ステルシアにはそれが自覚出来ない。

意識が身体から離れてしまったような、まるで他人の身体に視点だけに移ってしまったような、どこか現実離れた感覚。

ぬるつとした感触に、頬を撫でた右手が滑り落ちる。

震える掌を広げ、視線を落とす。

ステルシアの意識を飲み込むように、掌の赤色は一瞬で視界を覆う。

ステルシアの意識は、そこで途切れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9154y/>

---

虚構世界の魔法使い

2011年11月27日13時47分発行